



藤井厚二に学ぶ “日本の住宅”という思想

文= 松隈 章

一番身近な存在である住宅建築の大切さやその本質には
普段なかなか気がつかないものだ。
私自身も1995年の阪神淡路大震災を経験していなければ、
約百年前の住宅建築「聴竹居」と出会い、そして藤井厚二の
“日本の住宅”という思想を知ることはなかったのである。

まつくま・あきら／一九五七年兵庫県生まれ。北海道大学卒。竹中工務店設計本部所属。聴竹居倶楽部代表理事、八木邸倶楽部代表、後山山荘倶楽部共同代表、竹中大道具館評議員、住宅遺産トラスト監事。設計業務の傍ら近代建築の保存活用や建築展に数多く携わる。著書『聴竹居 藤井厚二の木造モダニズム建築』平凡社、『聴竹居 発見と再生の22年』(共編著)『聴竹居』の活動で日本建築学会賞・業績賞受賞。



「聴竹居」との出会い —— 阪神淡路大震災

一九九五年一月十七日早朝に発生した阪神淡路大震災では、多くの尊い人命が失われ、同時に見慣れた神戸の建物や風景の多くも失われた。そのひとつ兵庫県西宮市甲東園にあった武田五一が設計し一九一一年に建てられた「芝川邸」(二〇〇七年博物館明治村に移築)も半壊した。当時、私は武田五一のことも「芝川邸」のことも全く知らなかったが、竹中工務店大阪本店設計部の有志と神戸大学の学生による移築のための実測調査に加わることになったのである。

その実測調査の成果を広く社会に紹介し大震災と文化財保護を考

える企画展「芝川邸と武田五一展」を一九九六年に行うことになった。私は企画展向けのパネルや図録を作成する中で、藤井が一八九九年創立で黎明期にあった竹中工務店に最初の東京帝国大学卒業の学生として一九一三年入社し設計組織の基礎がつけられたこと、武田が一九二〇年京都帝国大学建築学科創設時に講師として藤井を招聘したことを知った。そして何よりも、和と洋が組み合わされた「芝川邸」や藤井の第五回目の自邸「聴竹居」(P.37参照)の存在を通じて明治生まれの建築家たちが西欧化・近代化の時代と格闘した事実を知ったことが大きかった。

一九二八年に建てられた「聴竹居」をどうしても実物を見たいと思っていた時、偶然にも三重県立美術館主催の「二〇世紀日本美術再見Ⅱ一九二〇年代展」が企画されていた。その企画展の建築コーナーでメインとなる「聴竹居」の展示にビデオや模型製作で個人的に協力したことが端緒となり、一九九六年の夏に担当学芸員と共に現地へ初めて訪れることができた。出逢うや否や私は和と洋が融合されたモダンな佇まいや真夏でも涼しいなど、「聴竹居」の不思議な魅力にとりつかれてしまった。そして一九九八年には藤井家との

「聴竹居」の不思議な魅力に導かれて。



個人的な繋がりが持っていたのである。「聴竹居」は一八九九年末に空家となった。その機会を生かして将来の維持保全に必要な図面作成のため、さらに「聴竹居」の魅力を解き明かそうとの思いで、二〇〇〇年に藤井の後輩にあたる竹中工務店大阪本店設計部の有志で二〇〇〇年に実測調査を行うことを決め実行に移した(二〇〇一年三月『聴竹居実測図集』彰国社刊)。時を同じくしてEconominoの日本支部が一九九九年に日本のモダニズム建築を代表する最初の二〇選のひとつに「聴竹居」を選定、翌二〇〇〇年には同展覧会が全国各地で開催され、「聴竹居」が社会的認知度を高めていく。さらに『聴竹居実測図集』を書店で偶然手に

藤井厚二が「聴竹居」で暮らした四〇代半ば頃の家族写真。読書室と名付けられた個室には、藤井自身と子どもの造り付けの勉強机や本棚など、家族の暮らしの痕跡も残っている。

された八木重一さんが私と繋がり、二〇〇三年に人知れず遺っていた「八木市造邸」(P.6参照)を訪れることが出来たのである。

藤井厚二の 「日本の住宅」という思想

「聴竹居」を設計した建築家・藤井厚二は、現在の広島県福山市に素封家の次男として一八八八年に生まれている。一八八七年生まれの世界的な建築家のル・コルビュジエとはひとつ違い、長生きした建築家・村野藤吾の三歳年上だ。一九一三年、東京帝国大学工学科建築学科を卒業し当時神戸にあった建設会社の竹中工務店に入社する。近代建設業への飛躍の途にあった竹中では、大阪朝日新聞社など主にオフィスビルの設計を手掛け設計組織の基礎をつくるが、わずか六年足らずの在籍ののち退社する。その後、一九一九年から二〇〇年にかけての約九か月間、私費でアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、イタリア、スイスを巡り、当時の日本でオフィスビルなどと比較して近代化が遅れていた住宅とその設備を中心に視察して帰国する。当時、第一次世界大戦は終結していたが、世界中でスペイン風邪が大流行していた時期に重なる。

日本の住宅は、見るもの全てに慕われる
「ふつうの住宅」である。



帰国後の一九二〇年に創設された京都帝国大学建築学科に招かれて教鞭をとった藤井は建築環境工学にいち早く取り組んだ。一九二三年の関東大震災の惨状を三週間後に視察、より一層「日本という気候風土」を強く意識した藤井は、代表的な著書『日本の住宅』を一九二八年に発行している。それは、緒言に続き、和風住宅と洋風住宅、気候、設備、夏の設備、趣味の五つの章で構成された建築環境工学の最初期の理論書として有名。明治維新以降の欧化・近代化政策で盲目的に欧米の模倣を推し進めた結果、和洋折衷と日本の伝統がただ雑然と混交している生活様式。さらに、欧米化する住宅を文化住宅と信じて忠実に模倣するような時代だった。そうした時代に「彼の歴史人情風俗習慣及び気候風土を対比せば、総て非常に相違のあることが知られます」との疑問を持った藤井は、その責任は建築家にあるとしたうえで、「我々は我が固有の環境に調和し、其の生活に適応すべき真の日本文化住宅を創成せねばなりません」と本書執筆の意義を緒言に記している。

藤井は建築環境工学による住宅研究と実践の完成形を「聴竹居」で実現し、その成果を図面と写真と解説からなる『聴竹居図案集』を一九二九年にまとめ、さらに一九三〇年には、理論書『日本の住宅』とこの図案集を合体させた英語版の『THE JAPANESE DWELLING-HOUSE』を著し、「日本の住宅」の素晴らしさを世界に向けて発信している。一九三〇年竣工の「八木市造邸」をはじめ約五〇〇の住宅を設計したが、一九三七年に完成した京都の中田邸「扇葉荘」が遺作となる。一九三八年七月十七日没享年四九。京都嵯峨野・二尊院にある自ら病床でデザインした墓所に眠る。日本の住宅の近代化に生涯を捧げた藤井が「聴竹居」に住んでわずか十年であった。

住宅建築は、その時代を写す鏡“生き証人”である。

藤井が遺した名言「其の国を代表する建築は住宅建築である。」
今から百年前の大正の終わりがら昭和の初めは、明治初めからの西欧化・近代化を終えて、ようやく日本の建築家たちが「日本人のための住宅」を求めて住宅改良・改善に取り組んだ時代であり、今、私たちが目にして、いる住宅建築のルーツ（源流）が誕生した時代だ。藤井の著書『日本の住宅』と自邸「聴竹居」はその代表格のひとつと言える。
今、日々削り続けられ、また、今後削られていく住宅建築のこれ

からを考えていくうえで、ここ百年間に建てられた近現代の住宅遺産の存在は極めて重要だ。住宅建築は文化・経済・社会、個人個人の価値観など、その時代を写す鏡“生き証人”として存在してきたからだ。そうした住宅建築を「聴竹居」のようにいわば博物館、つまり住まいをテーマに時代を記憶した「House Museum」として公開し活用することの意義は大きい。
しかし、優れた住宅を次代に遺していくことは容易ではない。日常の維持管理のみならず固定資産税や相続税が重くのしかかってくるからだ。「聴竹居」のように個人財産から企業財産に移行させたりえて重要文化財に指定し地元中心の一般社団法人聴竹居倶楽部で公開する活動や、名作住宅を中心に土地だけではなく建物そのものの価値を認め更地売却ではない住宅遺産の継承を所有者に寄り添いながらサポートする一般社団法人住宅遺産トラストの活動など、様々な動きがここ十年活発化しているが、経済至上主義の現代社会の趨勢に抗うことはなかなか難しい。
藤井は著書の中で「其の国の建築を代表するものは住宅建築である」との名言を遺している。
藤井が「聴竹居」を通して伝えようとした「日本の住宅」という

思想は、西欧の直輸入や和洋折衷や同時代を生きたコルビュジエなどが提唱したインターナショナル・スタイルとは異なり、日本の気候風土や日本人の感性に適應した日本人のための住宅建築を近代化しようとしたオリジナルな試みだ。日本の豊かな四季が生んだ茶や花を楽しむ生活文化の大切さや自然を感じる住まいの大切さにも気付かせてくれる。
「聴竹居」だけはモデル住宅として建築家・藤井の個性を表出するデザインになっていくが、藤井が真に求めたのは、「八木市造邸」に見られるように「日本の住宅は壮大で感動的な様子は持たない。ただ、見るもの全てに慕われるような魅力がある」として、板張りや漆喰の外壁、瓦を乗せた屋根と深い軒や庇、生垣などによる極めておとなしい外観、椅子座と床座（畳）を共存させ、最新鋭の家電をとり入れた「ふつうの住宅」だったのである。あくまで最新鋭の「ふつう」を示そうとしたのである。
二〇世紀の日本を代表する世界文化遺産候補として二〇一七年十二月に「日本の20世紀遺産20選」(日本イコモス委員会選定)に住宅として唯一選ばれた「聴竹居」は、二〇世紀の日本を代表する世界的な住宅遺産として、歴史と文化が

蓄積された大山崎町と一体となって「日本の住宅」の魅力の世界へ発信し続けるだろう。藤井が設計した住宅は約百年経つ今も京都を中心に関西にいくつも遺されていて、「聴竹居」をハブにしてそうした住宅の所有者をつなぐネットワークもできつつある。
コロナ禍が続いている昨今、奇しくもステイホームとして住宅の大切さが見直されてきてはいるが、まずは、現地を訪れて藤井の「日本の住宅」を体感し、さらに百年後の「日本の住宅」に思いをはせてみてはどうだろうか。

*1: たけだこいち。(一八七二—一九三八) 後福山(現広島県福山市)生まれ。関西建築界の父とも言われ、アル・ヌーボ、セセッションなど、欧州デザインの潮流を日本に紹介する。
*2: 武田五一による設計。木造二階建て。延べ床面積三三〇㎡。アルヌーボのデザインを取り入れ、煉瓦の煙突をもつ和洋の伝統を融合した関西を代表する近代洋風建築。
*3: モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織の日本支部。日本の近代建築の再評価と取り壊し予定の近代建築の保存活動を行う。
*4: J. A. Gohlstein (一八七二—一九六五) スイス生まれ。モダニズム建築の礎を築いた二〇世紀を代表する建築家。アトリエで学んだ前川國男、坂倉準三、吉阪隆正をはじめ、日本のモダニズム建築にも大きな影響を与えた。
*5: むらの、とらこ。(一八九一—一九八四) 佐賀県東松浦郡(現唐津市)生まれ。戦前戦後を通じ、古典からモダニズム、和風まで様々な建築様式を取り入れた独自の作風で評価される。
*6: 二〇一三年設立。貴重な住宅建築と地域の記憶景観を保存・継承を目的とし、「住宅」を「遺産」として後世に継承する文化の啓蒙と普及・住み継ぐための仕組みを行う。
*7: 一九六五年設立。国際記念物遺跡会議(International Council on Monuments and Sites/ICOMOS)略称。文化遺産保護に関わるNGO。